

心中

一

集 彼等は單に兩腕で互に抱き合つたまま、急行列車の來る前に、レールの上に二人の身を載せておくこともある。(しかし出雲ではこれは出來ぬ。まだ鐵道がないから) 時としては、自分等だけの小宴を催し、兩親や友達へ宛てた奇異な手紙を書きのこして、彼等が擧げる酒杯に或る苦が味のものを交せて、永遠の眠に入つて行く。時としては、もつと古い、もつと名譽ある手段を選ぶ。男は最初一刀で彼の戀人を殺し、それから自分の咽喉を貫くのだ。時としては女の長い縮緬の如き腰帶で、彼等は相向き合つて、しつかりと二人の身を縛つて、かやうに抱擁したまま、深い湖水や川に跳び込む。あの世界開闢のかた存在する古い悲哀によつて苦しめられる時、彼等が冥途に行く方法はさまざまである。——シヨペンハウエルはこの悲哀について、頗る奇抜な理論を書いてゐる。

彼等自身の理論は、もつと簡單なものだ。

日本人ほど人生を愛するものはない。日本人ほど死を怖れぬ者はない。未來の世について、彼等は何の恐怖も有たぬ。彼等が現世を去ることを惜しみ悲しむのは、この世が彼等に取つて、美

中

と幸福の世界と思はれるからだ。しかし歐洲人の心に對して、永く壓迫を加へてゐる未來の不可思議は、彼等にあまり心配を惹起こさない。私が今、語つてゐる若い戀人達は、一種奇異なる信仰を有してゐるので、それが彼等のために不思議を拭ひ去つて了ふ。彼等は限りなき信頼を抱いて、暗黒に振り向く。若し生涯があまりに不幸であつて、生きて行くに堪へられぬ場合、その責任はある他人のものでもなく、世間のものでもない。それは彼等自身のものだ。それは因縁、即ち前生に於ける過誤の結果である。この世でどうしても夫婦になれないといふのは、前生に於て彼等が婚約を破つたことがあるか、或はまた相互に殘酷であつたために過ぎない。すべて以上の考は異端ではない。しかし彼等はまた、もろ共に死ぬることによつて、未來の世界で忽ち夫婦になれると信じてゐる。尤も佛教では、自殺は恐ろしい罪だと斷言してゐる。さてこの死によつて夫婦の結合を獲るといふ觀念は、釋迦の信仰よりは遙かに古いものである。しかしそれが近代に於ては何ういふ譯だか、佛教から一種特別の歡喜的色彩、神祕的光耀を借用してきた。蓮の花の上で一緒に休息するといふのだ。佛教は無限の輪廻を教へる。靈は何億年に互つて轉生して、遂に無限の視覚、無限の記憶を得て、白雲が夏の蒼空に溶け行く如く、涅槃の幸福に没入する。しかし是等の惱める人達は、決して涅槃のことを考へぬ。彼等の至上の願望なる戀愛の結合は、ただ一回、死の苦しみを經て達成せられるのだと、彼等は空想してゐる。尤も彼等の空想は——その哀れな手紙が示す通り——同一では無い。あるものは阿彌陀の光明の極樂へ入つて行くと考へてゐる。あるものは、彼等の幻想的希望の中には、ただ先きの世のみを見てゐる。そこで生まれ

心

變はつた別個の若さの愉快の中に、愛人同志相逢ふものと期してゐる。實際大多數のものの觀念は、更に漠然としてゐる——夢の茫乎たる幸福に於けるが如く、霞める静けさの間を、相共に影の如く漂うて行くといふ觀念に過ぎない。

彼等はいつちも兩人一緒に葬られることを願ふ。往々この願ひを親達や、後見人どもによつて拒まれることがある。すると、世間ではこの拒絶を残酷な所業と考へる、といふのは、互に愛し合つて死んだ人達は、同一の墓を與へられないと、安心を得ないものと信ぜられてゐるからだ。が、其願ひが許された場合には、葬式は美はしく、また可憐なものである。二つの家から二つの葬列が出でて、提燈の火光によつて、寺の境内で相會する。そこで讀經と人を感動させるやうな慣例の式があつた後、主僧が死人の靈に向つて、挨拶を述べる。彼は深い同情を以て過誤と罪惡に就いて語り、犠牲となつた若い人達が、春に共に咲いて、また落ち行く花のやうに短命で、且つ美しかつたことを語る。彼は彼等をしてかゝる行動に出でしめた迷妄について語り、佛陀の訓戒を誦讀する。が、時として彼は、戀人達が未來の一層幸福にして高尚なる世界で、また結合するだらうと預言することもある。彼が單純なる雄辯を以て、かやうに一般世人の衷情を吐露するとき、聽衆は涙に暮れる。それから二つの行列は一つとなり、墓穴が既に掘つてある墓地の方へ進んで行く。二つの棺は共に下ろされ、穴の底で棺側が相接する。そこで『山の者』註が二人の境界をなせる板を撤して、二つの棺を一つにする。結合された兩死人の上に、土が盛られる。して、彼等の悲運の物語を刻める墓石が、恐らくは小さな歌をも刻み添へて、彼等の遺骨の交り合つた土の

上に置かれる。

註。「山の者」は死體を洗つたり、墓穴を掘つたりするのを専門の業とする特殊階級の人々である。洞光寺の上の山に、その部落があるので、斯く呼ばれてゐる。

中

一一

心
これらの戀人達の自殺は、心中または情死と名づけられてゐる——心の死、情の死、愛の死を意味する。それは女の場合では大部分、女郎の階級に於て行はれる。が、折々相當に立派な階級の娘の中で起こることもある。若し女郎屋の抱へ女の中で、一つの心中があると、必ず更に二つ起こるといふ宿命的信仰がある。屹度この信仰そのものが原因となつて、往々三つの心中が續いて起こるのだ。

31
家族が窮乏の極に瀕した際、自分から進んで恥辱の生活へ身を賣る哀れな娘達が、日本に於ては、(歐洲人の罪惡と殘忍が、風俗を壞亂する力となつてゐる開港場を除けば)西洋に於ける彼等の同胞姉妹ほど墮落の淵に落ちない。實際多くのものは、彼等の恐ろしい苦役の期間を通じて、かかる状態の下では、哀れにもまた異常と思はれるほどに、上品な風采、優雅な感情と生來の溫

淑を維持してゐる。

つい昨日のこと、一つの心中沙汰がこの静かな市を愕然たらしめた。灘町といふ町の醫師の下男が、夜明けの後暫くしてから、主人の息子の室へ上つて見ると、若主人が娘を抱いて共に死んでゐるのを發見した。この息子は勘當を受けてゐたのであつた。娘は女郎であつた。昨夜彼等の葬式が行はれたが、一緒には葬られなかつた。それは、父親がかやうな事件の起こつたことを悲しむと共に、また立腹したからであつた。

雲 女の名はおかねといつた。彼女は人並優れて美しく、また非常に温順であつた。して、皆の話によれば、樓主はかやうな醜い商賣柄には珍らしいほど親切に、彼女を遇してゐたらしい。父は死んで、一家は無一物となつたので、彼女は母と幼妹のために身を賣つたのだ。それは彼女の十七歳の時であつた。樓主の許へ來てから一年も経たぬ内に、その青年に逢つた。彼等は忽ち一所懸命の戀に陥つた。實に怖ろしい破目になつたものである。何となれば彼等は到底夫婦となり得る望みはなかつたからだ。青年はまだ息子といふ特權を許されてゐたが、彼よりも品行着實なる養弟のために、廢嫡の身となつてゐた。不幸なる男女は互の逢瀬を楽しむために、所有金を悉く使ひ果たし、女は自分の衣類をさへ賣却したのであつた。いよいよ最後に、夜が更けてから、彼等は窃かに醫師の家で會合し、劇薬を仰ぐとともに、永遠の眠に就いた。

私は女の葬列が、提燈の光り——微かな青白い燐光のやうな——によつて、寺町の方へ道を縫

つて行くのを見た。白い頭巾をかぶり、白い衣をつけ、白い帯をしめた女達の長い列が、ひつそりと音を立てずに續いて通つて行つた——幽霊の一群のやうに。

丁度かやうに、佛教の下界の想像畫に於ては、冥途へ行く暗黒の中を、白い亡霊が——亡霊のはてしなき行列——が飛んでゐる。

三

この悲劇の記事は、明日の山陰新聞に載るであらうが、私の友人なる該新聞の記者は、同情ある人々が最早、花と櫛の枝を捧げて、新墓を飾つたといふことを私に話した。それから彼は、日本の長い封筒から、美しい文字の満面に書かれた、長く卷いた、軽い薄い紙を取出し、私の前へそれを擴げて、つけ加へた——

『彼女はこの手紙を樓主に遺して置いたのです。これは新聞へ發表するため、私共が貰ひました。非常に立派に書いてあります。女のかく手紙の言葉は、男のと異つて、女は特別の言葉や文句を使ひます。例へば男の言葉では、その人の地位により、また場合により、私とか、我とか、予とか、僕とか申しますが、女の言葉では妾わらわはと申します。それから、女の言葉は非常に柔かです。そんな柔かな、愛嬌のある言葉は、とても他國語には譯されぬものと思ひます。ですから、私は手紙のただ大意をお話申上げるだけです』

して、彼は徐々と、次のやうに通譯してくれた――
『書置のこと。』

御存じの通り、去年の春このかた、田代様とわりなきおん仲と相成り候處、前世の因縁應報のため、入婦となること相叶はず、止むなく今日冥途へ旅立申し候。

不束者の妾に對し、御親切なる御取扱ひを戴き、且つまたいろく母や妹を御助け下されしにも係らず、誠に海山の御恩の萬分の一をも御返し申上げず、大罪人と御憎み下され候はんも御尤もの儀に存上候。

さぞ言語道斷の非行と御思召され候ことと恐入り候へ共、事情止むを得ざる次第、何卒御勘辨下され候様願上候。妾冥途に參り候ても、海山の御慈悲は決して忘却致間敷、草葉の蔭より御禮申上ぐべく候。返へすくも御宥るし下され度願上候。

猶申上度こと山々に御座候へ共、今は心も心ならず急がれ候まゝ、惜しき筆相納め申候。亂筆御免下さるべく候。かしく。

様

かねより

私の友人は脆い白紙を封筒に收め乍ら、霎時無言の後、批評の言葉を加へた。『これはいかにも心中の手紙です。それで貴下に面白いだらうと思ひました。それから、もはや日も暮れかけま

したが、墓がどうなつてゐるか、私は行つて見ようと思ひます。いかがです、貴下も御出でになりませんか？』

私共は長い白い大橋を渡つて、陰氣な寺町を通つて、妙興寺の古い墓場の方へ向つた、——すると、歩いてゐる内に段々暗くなつて、細い月が今しも寺の屋根の上にかかつた。

忽然遠い聲——朗かな美しい男聲——が星空の下で歌ひ出した。鳥の囀るやうな、不思議な魅力と調子に富んだ歌——かの民衆的感情を現した日本の歌調で、鳥の歌から學び得たやうに思はれる。或る愉快な職人が、家へ歸つて行く道すがら歌つてゐるのだ。冴えた霜夜に一つ／＼の音が、私共の耳に顫へながら迫まつてくる。しかし私には文句はわからない。

『あれは何ですか？』と、私は友人に問うた。

彼は答へた。

『戀歌です——』

指して行けとや、あの家をさして、

行けば近寄る、主のそば』

(落合貞三郎譯)

Shinju. (Glimpses of Unfamiliar Japan.)